

執筆者一覧（掲載順）

- | | |
|--------|---------------------------------|
| 有馬 絵美子 | 神奈川県立歴史民俗資料学研究所 博士後期課程 |
| 太田 原 潤 | 神奈川県立歴史民俗資料学研究所 博士後期課程 |
| 前田 孝和 | 非文字資料研究センター客員研究員 |
| 松浦 智子 | 非文字資料研究センター研究員
神奈川県立外国語学部准教授 |
| 孫 安 石 | 非文字資料研究センター研究員
神奈川県立外国語学部教授 |

■編集後記

今号は非文字資料研究センター第五期各班の研究成果報告を収録しました。第五期は2020年から2022年までで、その期間はコロナ禍の最中でした。制約が多かった生活の記憶はどこか遠くなりましたが、それでも個人や社会の何かが確実に変わったとの感覚はあります。各報告からは、制約の中での多様な活動と模索が伝わります。報告を読みながら、コロナでの変化を明らかにすることも非文字資料研究のテーマになりうると考えました。

個人論考は5点で、論文4点、書評1点。論文では有馬絵美子氏が「雪」を通して環境と暮らしの記憶や知恵を扱い、太田原潤氏は「雪形」（春先の残雪の形を動物や人の姿に見立てた形）と農作業の対応の記録と現在をクロスさせます。松浦智子氏は中国・明代内府への通俗文学作品の受容を西遊記の彩色絵図本から探っています。この3論文は身体や場、五感にかかわり、コロナ禍で「弱ったもの」を照射しているようです。前田孝和氏は近代沖縄神道史を概観し、神祇政策の集大成だった「沖縄県神社創立計画案」の成立過程や新版図と神祇の関係などを示しています。孫安石氏は「李正熙『韓半島華僑史』」の書評から韓国の新しい研究成果を紹介します。2論考は「植民地」にかかわるテーマでもあります。5点いずれも、現在社会の抱えている課題とシンクロしていると感じながら読みました。各報告とあわせて、非文字資料研究センターの今も見えてくる号になりました。（後田多敦）

■表紙説明

表紙図版は菅江真澄『すみかの山』の写本（秋田県立博物館所蔵）の図絵である（詳細はp.123～127参照）。

『すみかの山』は、秋田領仙北郡六郷の竹村吉幹による写本が残るのみであるが、この図絵には稚拙さを感じられ、着色等にも明らかな誤りがある。資料として扱うには躊躇を禁じ得なかったが、同じ写本にある裏表紙図版の図絵は、写しの中にも読み取ることができる事実があることを示唆するものであった。

真澄は三内の千本桜を見ようと出かけて古堰の崩れから掘り出された土器を見て、それを図絵に残したのであるが、その一帯は今の「三内丸山遺跡」にあたる。裏表紙に示した図絵の中には、一見して縄文時代中期の円筒上層c式の口縁部とわかる土器片や、同時期の板状土偶の胴部片とわかる破片が含まれている。その二点は三内丸山遺跡の出土品として見ても全く違和感がない。真澄は実物を前に描いたのであろう。

縄文土器には強い地域性がある。縄文時代中期の吉幹の住まい付近は大木式土器文化圏であり、三内丸山遺跡に代表される円筒土器文化圏からは外れる。吉幹は、実物のイメージがないままに真澄の線をなぞるしかなかった。しかし、写しからでも土器型式がわかるほどの情報が得られたのは、原本の真澄の図絵が土器類の特徴を的確に表しており、吉幹は、その忠実なトレースを心がけたからにほかならない。

表紙の図絵も同様に見ることができる。六郷在住の吉幹は八甲田山を目にしたことは生涯なかったであろう。図絵の峰々の表現などに実景と齟齬がないのは、真澄が意識的に描き分けたことを、吉幹は、技量はともかく、相応に表現することができたからでもある。

着色の誤りについては、それと気づいたときには既に後戻りできないほどにその丁が仕上がっていたためであろうか。（太田原潤）

非文字資料研究 第27号

The Study of Nonwritten Cultural Materials No. 27

発行日	2023年9月30日
編集・発行	神奈川県立博物館 非文字資料研究センター 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/
印刷	株式会社 精興社
雑誌コード	ISSN 2432-5481